

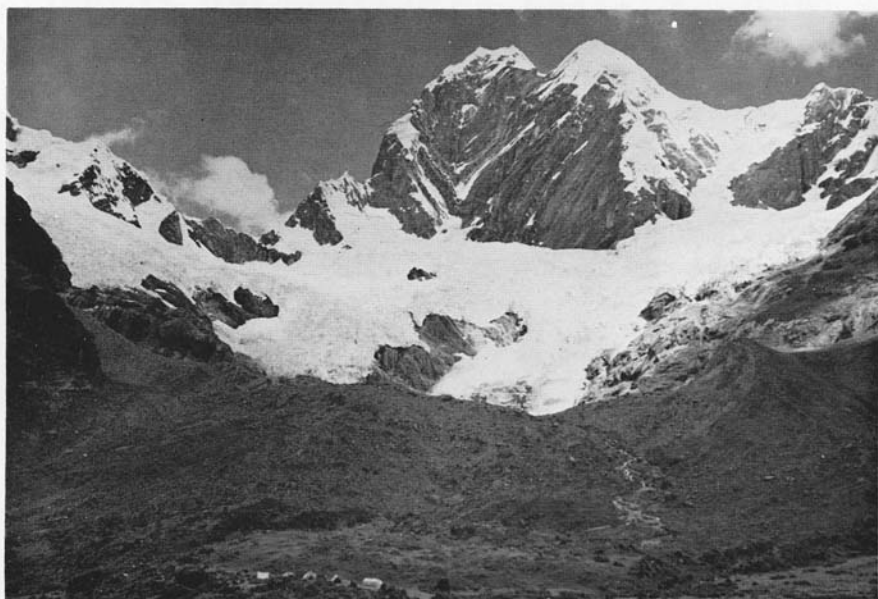
ワイワッシュ山群試登記

7月31日 シウラ・グランデ (6,356m) の稜線上の夜は、6月16日ワイワッシュ山群に入ってから、一番寒い夜であったろう。

8月1日 最後のアタックを試みるため、2名の隊員が、6,100m 地点にビヴァークをしている。果して、最終目標であるシウラ・チコ (6,265m) まで行けるだろうか。それともグランデまでだろうか。さもなくば、これ以上ほとんど進めないかもしれない。今年のワイワッシュ山群では、山岳地帯のインディオ達が云うように、雪の降るべき時期に降らなかったため、例年なら好天の続くべき6～8月の乾期に降雪を見るという、最悪の状態になっている。これは、カミソリの刃のような、頂上に続く最後の岩稜の氷や雪の状態を、いままで我々が入山後苦しめられてきたものよりなお一層悪いものにしているに違いないだろう。

想えば、悪天と、それにともなう氷雪状態の不安定さは、6月20日 ロンドイ・チコの垂直の岩壁の基部に、ヒリジャンカ・ノルテ (6,015m) 試登期間中の前進キャンプを設営し、その北東面の、ヒリジャンカ・チコ (5,467m) とロンドイ (5,883m) に挟まれた氷河に我々の第一歩を印したときから、悩まされつづけてきた。

我々の当初の計画は、チキアンで車をすててからのアプローチが、アンデスの山としては長いためか、忘れ去られていた感のあったこの山群に、日本隊として初めて入り、周辺の調査と、この地域で残された三つ6,000mを超える未登峰（ヒリジャンカ・ノルテ、シウラ・チコ、サラボ・ノルテ (6,080m)）のうち、ヒリジャンカ・ノルテおよびシウラ・チコの試登というのであった。前者は、その報告書が未公開であるため、ノルテ北稜に取り付き、その基部から約1,300mの氷と雪の岩稜を、三日三晩の悪闘の末、アメリカ隊が去年初登攀したということを知り、国内の下調査では知ることができなかった。去年この地域に入っていたアルゼンチン隊のメンバーが、我々とほとんど同じ場所に今年もキャンプをしていたため、始めてこのことを知ったのであったが、計画の変更はしなかった。



ロンドイ側から、ノルテ北稜の基部に氷河をトラバースするルートは、大した苦勞もなく開拓されたが、23日 前進キャンプの体制が整うと同時に降り始めた雪は、3時間ぐらいの短い時間であったが、10cm程の積雪を見、雪崩の危険をいっばいはらんでいた。登攀ルートとしては、(1)アメリカ隊の北稜ダイレクト・ルート、(2)ノルテに直接突きあげている、氷のいっばいつまった傾斜約60度のルンゼ・ルート、(3)ミトラフ(5,684m)との鞍部に登る、岩と氷瀑の入り混じったルートの三つが考えられたが、(2)ルートは雪崩の危険が大きすぎ問題外であり、我々は試登ということで(3)ルートを採った。

前期の試登期間が終り、後期用の食糧がチキアンから到着するまでの数日の日を利用し、ヒリジャンカ・チコの試登に、その北尾根を登っている時、厚い雲の切れ間から、足下に見えるニナ・コチャの乳白色の水面に、今にも崩れ落ちそうな氷瀑をエプロンのように垂らし、1,300m一気にそびえたっている、荒々しいヒリジャンカ北東壁を見ることができた。最高到達点約5,650mの稜線直下まで登ってきた第2次アタック隊の報告によれば、過去幾度かのアンデス遠征隊のレポートだけから学んだ知識では、到底考えられない最悪のものであった。しかし、今一度その壁を見たとき登攀ルート選定の間違いも、失敗の要因と云うことができた。逆層気味の大まかな岩と、頂上直下の大きく張り出した氷のオーバー・ハングの通過に、困難はいくらでも考えられるが、アメリカ隊の北稜ダイレクト・ルートしかなかったようだ。

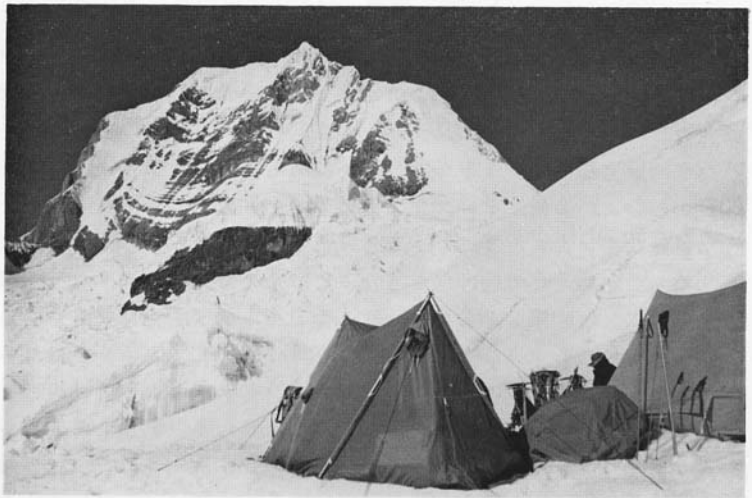
ヒリジャンカ・チコの試登は、7月5日 その北東氷河末端にビヴァーク、明けて6日 氷河を左にトラバース気味にチコ東峰(5,240m)との鞍部に登り、東稜からアタックをかけた。はるか東方のアマゾン源流あたりで、低気圧の発生か、時々稲妻の光るのが見られたが、ビヴァーク中、満天の星空に憂いはなかった。しかし、それも東稜取りつきの昼頃までで、おまけに、コル直下の岩場で、隊員の1人が足に落石を受けたことも重なり、頂上を目のあたりに見ながらも、約5,400m地点で引き返し、雨の降りだした中を、ベース・キャンプまで下山した。この試登には、もう一つの目的があった。それは、次期目標周辺のエルパハ(6,634m)、シウラ・グランデ、エルパハ氷河サラボ氷河の北方からの偵察というものであったが、天候の悪化でそれもほとんどできず、ただ遠く下の方に、調査目標の一つであるシウラ・コチャを見下すことができただけだった。

7月8日 雨の合い間を縫うようにして、チキアンより後期用食糧が、それを取りに行った隊員と共に到着した。4名と少なくなり、静かだったキャンプも、明日の移動をひかえ、にわかにあわただしさを加えた。

7月13日 移動最後の2日目の夕刻から降りだした氷雨に、出鼻をくちかれた格好の我々の後期キャンプにも、好天がめぐって来た偵察は順調よくほとんど1日で終り、苦しいボッカがまた やって来た。ベースキャンプの高度約4,200m、第1キャンプの高度約5,100m、高度差約900mを一気に登ってしまう。5時間余りの急な登路は、高山病の第一期症状が、第二期へと移



行しはじめる高度の上下だけに、20日余りのヒリジャンカの試登で馴れているというものの、非常に苦しいものであった。しかし、右手に鷹の爪と異名を取るヒリジャンカの尖峰、正面に「来るなら来てみる」と云わんばかりにどっしりと腰を落ちつけているエルパハとエルパハ・チコ (6,121m)、左手にエルパハの氷河を囲みノコギリの歯のように聳えているババリアの



針峰群、背後に美しい静かな水をたたえたカルワ・コチルチャの水面を望みながらの登路は、我々の苦しい努力を充分慰めてくれる素晴らしい眺めだった。

第1キャンプの位置は、フランスのエギーユ・ヴェルトを思わせるような、ババリアの針峰群より派生した岩峰の北側を西へ周り込み、氷河が後退したためにできた堆積地帯に、1時間程足をとられてからエルパハ氷河に出て、なお1時間程南にトラヴェースした氷河末端のプラトーの上にあった。そこは、第1目標であるシウラ・チコは見えないが、そこに続いているシウラ・グランデが、正面に両肩をいからして聳えているのが見られ、右手には、朝夕赤く輝くエルパハ東面の垂直1,300mの氷壁を一望に収めることができる格好の位置にあった。またその反対側には、エルパハ氷河がババリアの低い部分から押し出され、雪崩となって約700m落したためにできた氷河湖とそれに仲良く並んでいるシウラ・コチャが足下に、そのはるか彼方には、アマゾンの源流地帯を見渡すことができた。

18日には、シウラ・チコ試登の前進根拠地とも云うべき第1キャンプの建設も終り、19日からシウラ・グランデ右肩の下にあるアイス・フォールの基部に、第2キャンプを建設するべく、長い氷河のトレースが始められた。その日は無風快晴であった。13日の偵察のとき発見したルートをもとに、エルパハに向うアルゼンチン隊と相前後しながら（雪稜の状態が極度に悪く、南稜の5,700m地点ぐらいで引き返した）二隊に分れ、一隊はサンタ・ローザ東峰の左ルート、他は右ルートのトレースに向った。



アンデスの太陽は強烈だ。大きな麦わら帽を、高度のためガンガン耳なりのしている頭の上のせ何処にクレヴァスという落とし穴があるかわからない氷河の上を一步々慎重に歩くのであるが隊員の一人は日射病のため

にふらふらになり、もうすこしというところで、この中に落ち込むところであった。近頃流行の、ガス赤外線ストーブに、頭の上からあぶってもらっているようなものである。サンタ・ローザ右手ルート隊より、高さ 100m 程のアイス・フォールに行手を阻まれ、登行不可能ということが、この夜報告されたため、非常に長くなるが、同峰の約 300m の岩壁の下を左手、南側に周り込み、エルパハ氷河最上部のプラトーから、肩下にあるアイス・フォールに直接取りつくルートを採用した。20日からいよいよ最終キャンプである第2キャンプへの、トレースとボッカである。前日と同じような強烈なアンデス照りは、膝から腰あたりまで没する深雪や、肩に食い込む重荷と同様に我々を苦しめ、予定地点まで行けなかった。このために、サンタ・ローザ東峰の裏側に位置する最上部のプラトーに、仮の第2キャブを設営、翌日キャンプを上に移動させるために3名を残し、他は引き上げた。21日 予定通り無事肩下の 5,800m 地点に、キャンプは移された。22日から二手に分け、第2の3名はテント上部に続く傾斜約50度、長さ約 400m の鉄板のような堅い氷のトレース、第1の3名は機材および食糧の確保に当る予定になった。しかし、同日上の方に軽いスリップ事故があったため、ひとまず第1に下ることにしたが、その頃より天候は急激に悪化、視界約10m程の濃いガスが発生しだし、天気のリcoveryもおぼつかなくなったため、休養がてら吹雪の中を前日までのトレースをたよりに、ベース・キャンプまで下山した。そして、この天候の悪化は、27日まで我々をテントに釘づけにしてしまい、登頂不成功の最大要因となってしまった。



日本の秋の長雨の頃を思わせるような空からは、断続的に氷雨が降りそそいだ。テントの横にそびえているワイワッシュの山々は、厚い暗雲の中に姿を消してしまったようであった。こんな悪天の中を、26日 エルパハを目指す早稲田大学岳友会パーティーが、カルワ・コチャ湖畔にキャンプを張った。その夜は、連日の暗雲のように沈みがちな気分を一新するため、ささやかな交歓の宴を張った。しかし、この雲は、翌27日の夜半迄晴れることを知らずに、我々の持ち日をとうとうあと5日間と最小限まで少なくしてしまった。28日 天候好転のきざしに、最後のアタックを試みるべく活動再開した。

30日アタック隊員2名およびサポート隊員2名計4名は狭い第2キャンプのテントに入り、残り2名によりサンタ・ローザ東峰を西側よりアタックした。アタック隊は、この6日間に降り積った深雪のラッセルと、所々狼のように大きな口をあけて待っているクレヴァースに悩まされながらも、午後3時半サンタ・ローザ東峰(5,578m)の初登頂に成功し、待機するため第1キャンプへと、無事帰幕した。

31日 第2キャンプの4名は、残り4日間を利し、高曇りの烈風を突いて、日本では見られないような鉄板のような堅い氷に、一歩々タステップを刻みながら、シウラ・グランデ目指して出発した。6,000mの稜線上での烈風は、その氷壁と同様、高山病の影響著しい我々の足を、遅くする以外のなにものでもなかった。しかし、それに抗して、予定の2名は6,100m 地点に残り、サポート2名は、翌日あらためてアタックを追うことにして、一端第2キャンプに引き上げた。

その夜は、6月中旬ワイワッシュ山群に入ってから以来、本当に一番寒い夜であつたろう。我々に災いばかりもたらして来た悪天が、肩から先の、カミソリの歯のようなすどくとがった細い稜線の、雪や氷や岩に与えた影響は、想像を絶するものがあつたし、この寒さに冷えきった身体は、高度のため三、四歩行つては息をつかねばならぬいつもの歩調を、なお乱すものになるとしか思われなかつた。

7月が明けて、8月1日は快晴であつた。アタックの2名は、勇躍としてビヴァーク・ブラットをあとにした。サポートの2名もそれを追うようにして、あとに続いた。しかし6,100m 地点付近からの、やせたナイフのような岩稜は、不安定な雪と氷のミックスとなり、さし出す足の下から崩れ落ちて行くという、最悪の状態であつた。左手はエルパハ氷河へ1,000m、右手もラサック側へも1,000m 程一直線である。1人が足を滑べらせば、他の1人はそれを食いとめることは、ここでは不可能であらう。亀よりも遅い、稀薄な空気にあえぎながらの地獄の責めに等しい3時間余りの苦闘でかせげた高度は、100m にも足らぬものだった。サポートの2名も、下山のためのフィックス工作に苦勞をしていたが、食糧の関係もあり、この状態を何処で中止するかは、もう時間の問題になっていた。10日も好天が続き、食糧も充分あるなら、このまま続けるのもよからう。しかし我々には下山のために荷物を運ぶブーロが来るまで、もう3日しかない。食糧もそれでぎりぎりの線だ。また たとえ行つたとしても、登りより恐ろしい下りに、どんな落とし穴が待ちかまえているかわからないのだ。6日間の停滞になまりきった身体を、4日間も酷使しつづけたのに、あと3日間好天が続いたとしても、果してこの苛酷な稜線で持ちこたえることができるだろうか。と考えた時、生まれてこれ程後髪をひかれたこともなかったが、インディオ達がいうように最悪の年に来たのだから、よくよく精進が悪いのだからと、あきらめるより方法はなかった。

8月5日 また降り出した氷雨の中を、荷物を運ぶブーロが、アリエロ達と共にやってきた。サンタ・ローザ東峰の初登攀をなしおえたものの、目的のものがどれひとつとして、我々自身のこの足で踏むことができなかったため、気分の沈みがちな下山となつてしまった。6日 ブーロの背に荷物をつけて、住みなれたカルワ・コチャ湖畔のベース・キャンプ地をあとにすると、ふりかえると雲の切れ間から、何時に変わぬ神々しいシウラ・グランデの姿を、最後に見ることができた。イギリスの或る登山家の名言ではないが、*「何時でも此処にいるから、また帰っていらっしゃい」*と我々にほほえんでいるように……。

日	比	進	一
中	野		力
池	内	嘉	宏
米	川	利	美
長	谷	川	祐一